

樹里安 だより

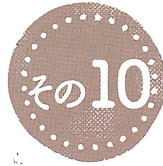


2025年
Vol.45

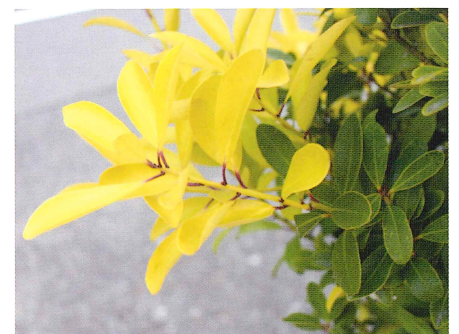


＼ 植木屋さんの／

おすすめ植物



オウゴンモチノキ



オウゴンモチノキってどんな植物？

庭木の三大名木として古くから愛されてきた「モチノキ」の園芸品種。新しく芽吹いた葉は黄色からライムイエロー、マットな緑色へゆっくりと移り変わる。強い萌芽力を持つ反面、生長は比較的緩慢なため春からの長い間鮮やかな色を楽しめる。また、生垣やシンボルツリーなど様々な仕立て方が可能である。

川口市公園紹介記

その10

植木畑が醸し出す、美しい文化的風景 歴史・自然・文化の宝庫

～埼玉県立安行武南自然公園・川口市域安行を中心に～

なんでも揃う、日本一の植木のまち

「すべての道はローマに通ずる」という有名な言葉があります。これを想起させる言葉「全国の植木は川口安行に繋がる」。この意を表出する児童文学書が、昭和18年(1943)発行の中島徳行著『日本見学旅行二の巻』です。本書の中の「日本一の植木の安行村」の章に、次のような、主人公のお父さんと子供達と村のおじいさんとのやり取りが描かれています。

「大宮で車をおりて、小さい電車のりにかへて小さい驛でりました。そこから別に、何の特色もなさそうな村のなかへ、兄妹をつれてゆきました。…(略)「あれをみなさい。」お父さんが指したのは、



植木屋の風景

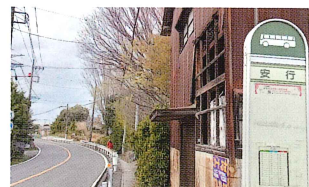


趣のある植木畑の風景

広い百姓家の庭に、一ぱい作ってある植木や苗木でした。…(略)…ここは安行村だ。この安行を中心に、二十何ヶ村が、みな、庭木や、苗木や盆栽をつくるのを商売にしている。…(略)…「こんなにたくさんの植木を、いつたい、どこへ売るんでせう。」「どこことって、日本全国が商売相手だ。何しろ、日本一の植木村だから、およそ、どんな木でも苗木でも、ないものはない。…」と。(原文旧漢字旧仮名遣いを引用)

本書の続きをさらに読み進みますと植木の送り先が登場します。リンゴの苗は青森・長野。さくらんぼは山形・福島。ミカンや和歌・三重等々。安行から多品種多品目の植木苗が全国津々浦々に送られていることの一端を、この児童文学書から垣間見ることができます。「川口安行に行けば無いものはない。何でもそろそろ」この安行を褒めたたえる本書の記述に、この地域を愛する者として感動を覚えてなりません!

そしてこの植木の里安行を中心に広域指定された公園が「県立安行武南自然公園」です。



ようこそ安行へ!

歴史・自然・文化の宝庫 県立安行武南自然公園

公園の区域は、さいたま市東部緑区の一部と川口市安行地区を中心に神根・戸塚・新郷地域に広がり総面積は1,159haに及びます。県内にある他9か所の自然公園とは異なり都市部にある稀有な公園です。川口市域の面積は728haです。埼玉県内にある優れた自然の風景地を保護し、その利用の増進を図ることにより、県民の保健・休養等に資することを目的として「自然公園法」により指定されたものです

区域内の見どころは、安行原自然の森、保存樹木、赤山歴史自然公園(イナパーク川口)、市立グリーンセンターなどの公園施設。猿貝貝塚、

新郷貝塚、赤山城などの遺跡や史跡。イチリン草自生地、赤堀用水等水辺の景観。興禅院、西福寺、金剛寺、安行氷川神社等。これら寺社と緑とが一体化した社叢林。民俗行事としての安行原蛇造りなど見どころが盛りだくさんです!

安行武南自然公園は、安行台地の斜面林と赤堀用水などの水辺とが一体化し重要な緑の骨格を形成。農地・生産緑地として広がる「植木畑」などが絶妙な風景を形成。それらが豊かな自然環境を維持・保全する拠点を形成する「緑の風景の文化的プラットフォーム」とも呼んでも過言ではない川口の宝です!



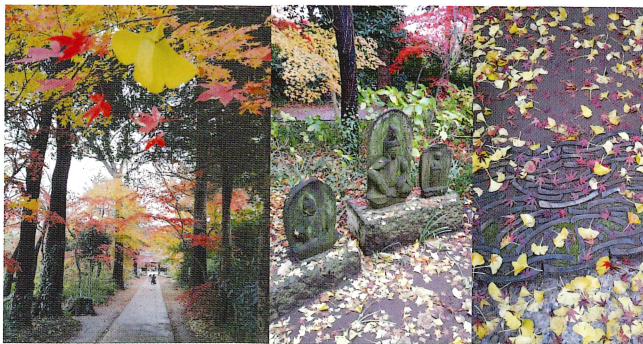
自然公園を象徴する表示



県立安行自然公園区域図



自然公園内の風景



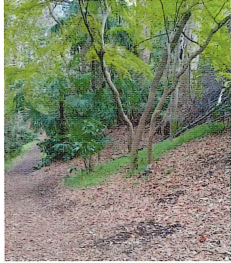
美しい安行の風景(花の寺興禅院)



安行式土器発祥の地と安行植木の交流を示すモニュメント

安行氷川神社の傍に「猿貝貝塚」という縄文時代の遺跡があります。「安行式土器」発祥の地です。大正8年(1919)縄文学の父と呼ばれる考古学者「山内清男(やまのうちのすがお)」博士がこの貝塚を発掘。当地から出土した土器を「安行式土器」と命名したことに因みます。

貝塚は、安行氷川公園周辺の北斜面と西斜面に広がり、ヤマトシジミ、ハマグリ、カキ等からなり、真水と海水が



猿貝貝塚の風景



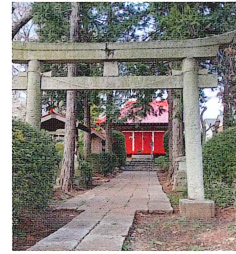
貝の散布状況

交じり合う水環境により形成された貝塚としての特徴がみられます。

また、本公園の区域内には縄文時代の多くの遺跡が見られ、考古学ファンにはたまらない遺跡の宝庫でも

あります！

そして、安行氷川神社参道の左手奥にある植木の碑(仙元大菩薩石碑)は、江戸時代後期の文久3年(1863)に安行の植木屋仲間が奉納したものです。安行・安行領家村他、江戸上駒込村の植木屋などの名が刻まれていて、当時の江戸と安行との交流関係を物語る貴重な資料の一つです。



安行氷川神社



仙元大菩薩石碑

石碑裏面

若き会長が伝統継承に奮闘！ 市指定文化財・農業遺産「安行原の蛇造り」

安行原にジガケ(ジンガケ・陣掛け)と呼ばれる場所があります。戦国大名千葉氏の重臣「原弾正」(はらだんじょう)という武将が陣を敷いた場所と伝わっています。この場所で、江戸時代から連綿と続く、稲藁で全長10mにも及ぶ巨大な蛇をつくる民俗行事が行われています。毎年5月24日限定の稀代な伝統文化行事です。

大蛇は原弾正の化身とも言われており、胴にその結われの証としての懐刀が付けられています。弾正の命日とされるこの日、安行原で植木屋を営む旧家の人々が集い造ります。五穀豊穡・天下泰平・無病息災などを祈願し、樹齢600年といわれるご神木の太樹に奉納。(現在は、代替の檜に奉納)最後に大きな数珠を引っ張る「百万遍」という行事で締め括り当所に一年間安置されます。本行事は昭和51年(1976)川口市の無形民俗文化財に指定され、安行原の蛇造り保存会(会長沖田保氏)により保存継承され現在に至っています。

令和5年春、同保存会が『第35回農村地域文化賞優秀賞』を受賞しました。農村地域の伝統的な文化活動や地域生活文化継承活動に寄与した功績に対して高い評価を受けての栄えある受賞です！

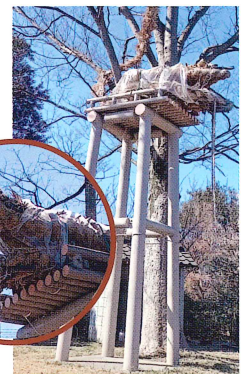
「景観10年、風景100年、風土1000年」という言葉がありますが、安行原の蛇造りは、水との関連が強い稲作と水の神の化身「蛇」を稲作の副産物の「藁」で造り上げ豊穡祈願を蛇に託す「農耕儀礼」として。加えて、

稲藁の蛇が懐刀を携えていることから、村々への悪病退散の祈願を込めた「フセギの行事」として連綿と続くこの地域の風土を形成してきました。さらに、当地域の植木を生業とする人々の蛇造りの伝統継承を通じて、緑にちなむ風景の継承に寄与しています。安行植木の歴史・伝統が醸し出す文化的風景の継承なのです。

今、本保存会の若き会長は、SNS時代の潮流に合わせ、地元の小学生へのオンライン授業やブログ配信などの新しい情報発信を駆使し、この伝統文化行事を次世代へと繋ぎ、さらなる時代への継承にむけて日夜邁進しています。古来より連綿と続く歴史・伝統・文化の保持・継承をしている姿勢には敬服の念に堪えません！



安行原の蛇造りジガケの風景



奉納された大蛇

世界の国から安行へ！文化観光としての可能性を探る

全世界を席卷した新型コロナウイルス(COVID-19)パンデミックが、2023年春に収束しました。これに伴い自粛対象となっていた観光産業が息を吹き返し、パンデミック前を凌ぐ勢いを見せています。日本への訪日外国人の急上昇傾向が見られる昨今でもあります。

この要因は、現在、欧米豪を中心に日本の文化が脚光を浴びていることにあります。所謂ジャポニズムブームです。過去に何度かこの現象が見られましたが、今、次なるネオジャポニズムブームが世界を席卷しています。日本の文化に世界の人々が魅了し羨望のまなざしを注いでい

ます！この日本文化の主たるアイコンは、「和食、祭り、漫画、盆栽、将軍」と言われています。

川口が世界に誇る「安行ブランド」。この中に「盆栽」というアイコンがあります。これを包摂し担う緑の町安行にとって、安行ブランドが観光コンテンツに変容する絶好の好機が到来したともいましょう！

近い将来、世界の国々の人々が安行を訪れ、安行の植木屋が形成する緑と社寺との融合から醸し出される、文化的風景を体感する日が来ることを、今から期待をしています！

県立安行武南自然公園



指 定 昭和35年11月4日
所 在 地 川口市(さいたま市)
面 積 川口市域728ha
(全域1,159ha)

域 内 施 設 イナパーク川口、赤山陣屋、グリーンセンター、県立花と緑の振興センター、新郷貝塚、猿貝貝塚、西福寺、興禅院、金剛寺密蔵院、安行原の蛇造り他
ア ク セ ス お車：「川口中央・川口東IC(東京外環自動車道)新井宿・安行・新郷出入口(首都高速川口線)」
電車：「JR東川口駅、SR東川口・新井宿・戸塚安行駅」

川口を
ふるさとに



海が繋ぐ

台湾・琉球・安行

波多野 純 日本工業大学名誉教授

王船祭が伝える海の豊かさ-台湾東港

昨年(2024)、台湾屏東県東港を訪ねた。「桜エビは日本の駿河湾とここでしか獲れません」と言われたように、海の幸に恵まれた港町である。町では3年に一度、華やかに彩られた船に台湾中の厄を積み込み、明け方に海岸で焼き尽くす、王船祭が繰り広げられる。祭りは中国福建省から台湾東港そしてマレーシアに伝えられた。

祭りの前段として国際シンポジウム「2024屏東迎王平安祭典国際論壇」が開催され、台湾・中国福建省・マレーシアから、民間信仰、民俗、町おこしの専門家が集まった。私は「台湾建築のルーツを探る～環太平洋・大陸・琉球・日本～」をテーマに講演した。私の紹介・主題解説と通訳は、私のもとで博士号を取得し大学教員として活躍する李東明氏と顔敏傑氏が務めてくれた。

講演テーマには背景がある。だいたい前だが、ニューヨークのアメリカ自然史博物館を訪ねた。その日本の展示には、十二単・衣冠束帯・マタギ・碁盤・琴・能面が、具体的な意図を示さないままに並べられていた。さらに周囲を見ると、ハワイ・ポリネシア・パプアニューギニアなどの展示が並んでいた。「日本文化が島嶼の民族文化のひとつに扱われている」そんな不愉快さが心をよぎった。でもその不愉快さは、ヨーロッパ文化に優越性を認める、私自身の心の狭さと劣等感に由来す



饗装された王船祭の船



東隆宮門前の前夜祭
民俗芸能が繰り広げられた

る。日本酒をグラスに注ぎ「ワインのようにきれいな酒ですね」と言う発想である。日本酒もワインも、それぞれの個性や魅力を認めればよいだけであり、優劣を競うものではない。テーマに「環太平洋」を入れたのは、あの時からの私の宿題だからである。海は人を隔てるものではなく、交流の道である。

講演では、鎌倉時代に中国福建省からもたらされ、東大寺大仏殿の再建に用いられた様式・技術である大仏様について、日本では大規模建築にふさわしい技術と捉えられているが、台湾では規模に関係なく用いられていることなどを、モダニズム批判を踏まえてお話しした。ここではもう少し生活に近い住まいと墓所についてとりあげる。

海を渡る住まいと墓所

台湾の南東端台東から小型飛行機で1時間ほどのところに蘭嶼と言う島があり、30年近く前に訪ねた。原住民タオ族の住まいは、緩やかな斜面を四角く1m～1.5m掘り窪め周囲に石垣を積み、その中に一回り小さく住まいを建てる(半穴居住居)。台風対策である。もちろん暑いので、脇に高床の寝所を設けている。住まいの敷地を低くする発想は、石垣島の宮良殿内(国重文)にもみられる。門から数段下がつて屋敷地に入る。

墓所もまた、台湾と琉球の連続性を強く感じる場所である。



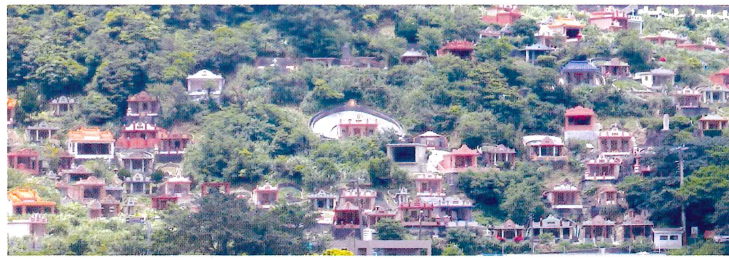
台湾・蘭嶼の半穴居住居



斜面に亀甲墓と呼ばれるふくらみのある墓を築き、その前に切妻破風や唐破風で飾られた入口部分を設ける。そこは人

が入れる空間規模で、中で酒盛りが繰り広げられることもある。

住まいや墓所の作り方は、日々の生活のなかで育まれるものであり、国家が一律に決めるものではない。まさに、海を道とする人々の交流が、よく似た生活文化を育んできた。



台湾・金瓜石(左)と沖縄・古宇利島の墓所



植物園に埋め込まれた台湾と沖縄の近現代史

近現代史においても、台湾と沖縄の関係の深さを感じさせる植物園が、沖縄(旧コザ)市にある。大林正宗(李堅)氏によって造られた東南植物楽園である。同氏は、台湾花蓮市の生まれで、沖縄へ移住し、1968年にコザ市に大林農園を開園、76年に東南植物楽園に改組した。琉球華僑総会最高顧問を務め、2013年に84歳で亡くなった。園は経営主体が代わったが、彼の想いは着実に引き継がれている。

園の魅力は、群として植物を見せる景観構成にある。まず、ユスラヤシ。オーストラリア・クイーンズランド原産のヤシで、台湾から種を持ち帰り、うっそうたる森が形成されている。マダガスカル原産のバオバブは精霊が宿る木として知られ、

「星の王子様」にも登場する。マスカリン諸島原産のトックリヤシの並木道も魅力的である。

心に沁みたのは一本のナツメヤシ。説明文を抄録する。「時代と場所を超えるナツメヤシ 幹にある10ヵ所以上の穴は、第二次大戦時の台湾南部で、機銃掃射を受けた痕跡。(中略)生々しい傷跡と、あ

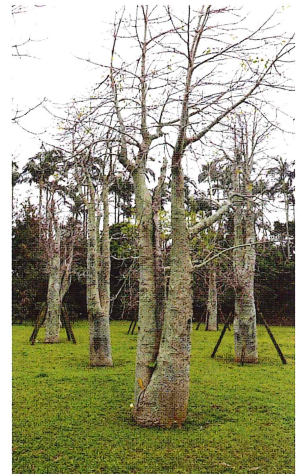
ふれる生命力を持ち合わせ今、楽園に凜と立っている」。園の歴史より長い歴史が刻まれた一本の樹木を見ながら、台湾と沖縄の繋がりの深さを実感した。



うっそうたるユスラヤシの森



ナツメヤシ
右下は台湾で
受けた機銃掃射の痕跡



バオバブの森



トックリヤシの並木道

安行のソテツが繋ぐ世界

ソテツ(蘇鉄)は、どこか南国を感じさせる植物である。自生地は、宮崎県都井岬あるいは長崎県福江島を北限とし、九州南部から奄美、沖縄、台湾、中国南部(福建省)に分布する。これまで話してきた地域とも重なり、首里城にもなじんでいる。

このソテツ、江戸時代末期の安行でも盛んに取引された。嘉永4年(1851)『安行村加藤家植木売揚覚帳』には「素鉄式十一瓶」とあり、植木ばかりでなく、鉢植えや盆栽にも利用され、売り上げに大きな割合を占めている。文久3年(1863)『安行村中田家植木売揚帳』にも「金苞分二朱也てつ」とある。また、この文書には「百式拾四文さぼてん」ともあり量は少ないがサボテンも取引された。南国さらにアメリカ大陸へと想いは繋がっている。



首里城とソテツ

安行界隈の

希樹・珍樹を探る!

ヒマラヤスギ (*Cedrus Deodara*)樹齢 推定160年 樹高 約15m 幹回り 2.6m
安行植物園 川口市安行816

川澄 寛國 樹木医



今回訪れた安行植物園は、江戸時代から続く植木文化の歴史を紡ぐ名門の園。明治初期には、植木や植物の国際貿易に挑むとともに、独自に製作したカタログを活用して植木や花、盆栽の通信販売を開始。当時から安行の植木界を牽引する革新者としての地位を築いていました。現在も、代々の伝統を受け継ぎながら、22代目の手で運営されています。この歴史深い園内では、数々の由緒ある銘木が訪れる人々を魅了しています。

その中で、今回取り上げるのは、ひときわ印象的なヒマラヤスギの大木です。

園の正門をくぐり、奥へと進むと、その雄々しい姿が視界に飛び込んできます。地面にしっかりと根を張り、力強くそびえ立つその姿。しかし近づいても、茂る枝葉に隠れ、正面からではその全容を捉えることができません。木の横を通り過ぎ、振り返り、ふと仰ぎ見ると、思わず息を飲む光景が広がります。驚くべきことに、樹冠の上部、つまり「頭」の部分が完全に折れて失われているのです。さらに折れた頂点から根元にかけて、幹がむしり取られたように、ある幅で露出した材が続いています。この壮絶な姿は、とても人間の力で成し得る



歴史を感じさせる門構えの安行植物園

ものではありません。「雷の仕業に違いない」と直感し、あたかも自分自身も雷に打たれたような衝撃を受けました。

園主によれば、この異変が起きたのは2019年9月11日の夜。近隣の住まいにいた園主が耳をつんざくような爆音を聞き、急ぎ駆けつけたところ、このヒマラヤスギの樹冠が吹き飛び折れ落ち、幹が上から下まで裂けていたとのことでした。

ヒマラヤスギは、インド西部ヒマラヤを原産とする針葉樹で、原産地では樹高50メートルにも達する高木。わが国へは明治時代初期に伝来しましたが、この園のものは、我が国最古のものうちの一本と伝わっています。樹齢は百数十年と推定され、落雷前の樹高は20メートル台後半に達していたといいます。



上部が消失している

雷は、数百万ボルトの電圧と数万アンペアの電流といわれ、雷が木に落ちると、内部の水分が瞬時に水蒸気となり爆発的に膨張し、幹や枝が裂けることがあります。針葉樹では水分が幹の周辺部に集中しているため、この木のように、中心部を保ちつつ周辺が裂けることで、倒壊を免れることが多いです。又、裂け跡が捻じれて幹を下降していますが、樹木は、程度の差はあれ捻じれながら成長するもので、その過程が見える点も興味深いです。落雷後5年あまり、生きている幹は、剥けた材周辺の強固な防護壁で守られ、枝葉の茂りは旺盛な樹勢を示しており、この木が引き続き健全に成長していることを物語っています。

ところで我が国では雷は、「神鳴り」と呼ばれ、単なる自然現象を超え、神々の象徴として崇拝されてきました。また、「稲妻」の名の通り、雷雨は稲作の恵みと考えられ、農業と深く関わりがありました。古代の農民たちはきっと、「空中室

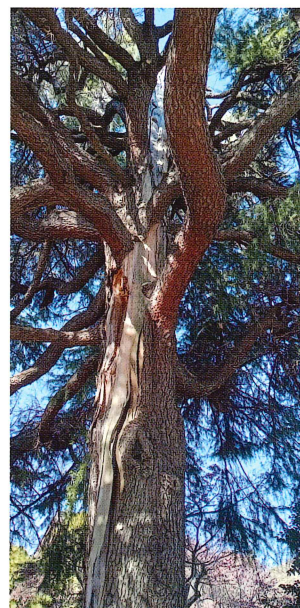
素固定」を実体験の中で理解していたのでしょうか。このように雷は文化や信仰に深く根ざしており、科学が進歩した現在でもその神秘性は失われていません。

さて、ヒマラヤスギの学名は「*Cedrus Deodara*」ですが、その名の由来、歴史を辿ると、この木が古来からいかに神聖視されてきた木であったかが分かります。属名の「*Cedrus*」はラテン語で「杉」を意味し、「*Deodara*」は、「神の木」を意味するサンスクリット語からきています。つまり、ヒマラヤスギはその名の通り、はじめてから「神の木」として崇められてきたのです。インドや西洋においても、宗教儀式や寺院建築に欠かせない特別な存在であり、その木材は耐久性・防腐性に優れ、古くから長寿や永続の象徴とされてきました。さらに、ヒマラヤスギから抽出されるオイルは癒しと精神安定の象徴として、今でいうアロマセラピーなどに利用され、心身の調和をもたらす神秘の力があるとされています。

樹冠が吹き飛び、幹を剥ぎ取られたこのヒマラヤスギ。それでもなお、太く力強く直立するその姿は、圧倒的な存在感を放っています。その迫力ある佇まいからは、荘厳さと神々しさが溢れ、見る者に深い畏敬の念を抱かせます。高い木は雷を受けやすいと言われますが、こうしてみると、このヒマラヤスギの場合、雷が落ちたのは偶然ではないのかもしれない。まるで神々が「神の木」を選んで降り立ったようにさえ感じられます。裂けた幹が語るのは、神の降臨という壮大な物語です。このヒマラヤスギは、そうした物語を刻みながら、安行植物園という静かで恵まれた環境の中でなお命を育み、その神々しさを一層深め続けていくことでしょう。いつの日か、この木が安行の「神」として、しめ縄に飾られた姿が見られる日も訪れるのではないのでしょうか。



てっぺんから根元まで幹が剥ぎ取られている



枝葉がよく茂り樹勢は旺盛



生きている部分を守る強固な防護壁

日本人の自然観と植物

～二十四節気と七十二候～

昔から日本には、自然を愛くしみ自然と共に暮らしてきた伝統と文化があります。日本の風土には、春夏秋冬、四季折々の美しい移ろいがみられ、日本人には、この自然の変化を巧みに捉え、日々の暮らしに活かしてきた長い歴史があります。

この連綿と続く歴史の中で、春夏秋冬を24の季節に細分。それぞれに、その季節の特徴を表す名前を付けています。「二十四節気」(にじゅうしせつき)です。

さらには、季節に対する日本人の感性の凄味の表徴として、この24の季節を三つづつの時節(24×3となります!)に分け、名前をつけ、72もの季節観を生み出しています。そして、自然の流れ

に寄り添い暮らしに活かす指標としています。これを「七十二候」(しちじゅうにこう)と呼びます。

今に伝わる七十二候は、江戸時代の天文学者・神道家で、初めて日本独自の暦『貞享暦 じょうがんれき』をつくった、映画『天地明察』の主人公としても描かれた「渋川春海」(しぶかわはるみ/しぶかわ しゅんかい)が、『本朝七十二候』として確立させたものです。

古来より日本の人々は、二十四節気・七十二候という季節観を、農事や旬を楽しむ「生活の暦」とし、季節の変化や季節を感じ取る羅針盤としていたのです!

「七十二候」に因む、花卉・草木に関する記述をご紹介します!

春夏秋冬の中、桃に始まり落にいるまで、11にも及ぶ花木の旬を現した時候(季節)が見て取れます。驚くべき日本人の自然観、そして美意識の凄さを体現しています!

冬

第七十候(1月21～24日頃)
款冬華さく(ふきのはなさく)*大寒の頃

第六十候(12月2～6日頃)
橘始めて黄ばむ(たちばなはじめてきばむ)*小雪の頃

第五十七候(11月17～21日頃)
金盞香く(きんせんこうばしく)*立冬の頃

第五十五候(11月7～11日頃)
山茶始めて開く(つばきはじめてひらく)*立冬の頃

秋

第五十候(10月13～17日頃)
菊花開く(きくのはなひらく)*寒露の頃

第八候(3月10～14日頃)

桃始めて笑く(ももはじめてさく)*啓蟄の頃

春

第十一候(3月25～29日頃)
桜始めて開く(さくらはじめてひらく)*春分の頃

第十八候(4月30～5月4日頃)
牡丹華さく(ぼたんはなさく)*穀雨の頃

第二十三候(5月26～30日頃)
紅花栄く(べにばなさく)*小満の頃

夏

第二十九候(6月26～30日頃)
菖蒲華さく(あやめはなさく)*夏至の頃

第三十二候(7月12～16日頃)
蓮始めて開く(はすはじめてひらく)*小暑の頃



川口緑化センター・道の駅「川口・あんぎょう」

ジュリアン
樹里安

発行 令和7年3月

公益財団法人 川口緑化センター

〒334-0058 川口市安行領家844-2

☎ 048-296-4021



<https://www.jurian.or.jp/>